

★ 茶 病虫害情報（炭そ病、クワシロカイガラムシ）

9月中旬の巡回調査で、茶の炭そ病は山城、丹波、丹後とも「平年比多い」発生状況でした。また、クワシロカイガラムシは、山城、丹波で「平年比やや多い」、丹後で「平年比多い」発生状況でした。

これらの病虫害の多発生は、翌春の一番茶収量を低下させたり、樹盛を衰えさせる原因となります。多発している茶園では、今年最後の防除を徹底しましょう。

1 炭そ病

（1）発生状況

9月17～18日に行った巡回調査では、1㎡枠の調査において発病葉数が、山城で8.3葉、丹波で20.0葉、丹後で4.0葉でした。この数値は過去10年間（丹後は6年間）の中で最も多い値でした。また、発生ほ場率も、山城：76.2%、丹波100.0%、丹後50.0%で、各地域とも最も高い値でした。

（2）防除上の留意点

本病は、5月～10月までの長期にわたり発生し、特に二番茶芽と秋芽に発生が多いと言われています。秋芽での発生は、越冬病葉として翌年の伝染源となり、一番茶の収量・品質に大きな影響を及ぼします。秋芽の生育期に降雨が続くと発生が多くなります。同一系統の薬剤の連用は避け、降雨前の薬剤防除に心がけましょう。

2 クワシロカイガラムシ

（1）発生状況

9月17～18日に行った巡回調査では、1ほ場当たりの寄生箇所率は山城で27.6%、丹波で10.0%、丹後で26.3%でした。また、発生ほ場率は山城で71.4%、丹波で100.0%、丹後で75.0%でした。

（2）防除上の留意点

防除適期は半数ふ化卵塊（雌介殻内に産卵された卵の半数以上がふ化した状態）の比率が50%を超えた頃です（平年：9月下旬～10月上旬）。卵のふ化状況は介殻を剥がしてルーペ等で観察してください。また、薬剤散布はノズル等を選択し、株内部の枝に十分かかるように努めましょう。



図1 クワシロカイガラムシの抱卵の状態



図2 クワシロカイガラムシの卵と幼虫

（写真提供 京都府農林水産技術センター農林センター茶業研究所）